

若年層の友人関係意識

—通信環境の変化と友人関係で変わったもの・変わらないもの—

研究開発室 宮木 由貴子

目次

1. はじめに	5
2. コミュニケーションに対する意識と実態	6
3. 友人関係に対する意識と実態の変化	10
4. 考察	14

要旨

- ① ここ10年間ほどで、我々をとりまく通信環境は激変し、対人関係の構築プロセスや関係維持の方法も変わってきた。こうした変化の中、若者の友人関係における意識や実態はいかなるものかについて、15～44歳の男女を対象に調査した。本稿では過去の調査と比較するべく、特に16～29歳の男女について分析を行っている。
- ② コミュニケーションに対する意識についてみると、女性では「相手のことをより理解したい」「自分のことをより理解してほしい」という欲求が男性より強い。また、女性は自己開示の度合いが高く、他者に対する意識も高い傾向がみられている。コミュニケーションの好き嫌いを示すコミュニケーション親和性については、男性より女性で高いものの、その差はそれほど大きくなかった。
- ③ 友人関係についてみると、「友人は多ければ多いほどいいと思う」とする人が減少している。また、友人との争いごとを回避し、嘘をつかないなど、友人との関係性を尊重しつつも、友人とのつきあいのために親や家族を犠牲にしない傾向が強まっている。実際の友人数についてみると、「電話で連絡をとりあう人」が10年前と比べて減少した。また、「ネット上だけのつきあいの人」は、女性より男性で、また年代が上がるほど多い傾向がみられた。
- ④ 友人関係について「非常に満足している」とする割合は過去の2時点（1998年・2001年）と比べて全体的に大幅な変化はないものの、男性の満足度が上昇して男女差が縮小している。
- ⑤ 自己開示性が高く、コミュニケーション親和性が高い人では友人数が多い傾向があり、さらに友人関係満足度も高い傾向がある。しかし、ネット上でつきあっている人の数は自己開示性やコミュニケーション親和性、さらには友人関係満足度とも関係が認められなかった。

キーワード：友人関係、コミュニケーション、通信メディア

1. はじめに

(1) 調査の背景と目的

筆者が通信メディアと対人関係について研究を開始した1990年代、インターネットはまだ誰もが自由に使えるものではなかった。パーソナル通信メディアについても、若年層の多くはポケベルやPHSを利用しており、コスト負担が大きい携帯電話は就職してから利用する人が多かった。技術革新とコストダウンの実現により若年層にも携帯電話が普及し、やがて携帯電話でのメール交換とホームページの閲覧が一般化した。通話機能にカメラやホームページの閲覧、テレビ視聴等の機能がついたタイプから、よりパソコンに近い小型情報端末として位置づけられるスマートフォンの普及が進み、携帯電話はもはや単なる電話ではなくなった。

通信環境の変化は、「友人関係の構築・維持におけるインフラ」の変化でもある。通信メディアの主流が電話だった時代、友人関係の構築は基本的に対面で行われ、関係維持のサポートに家の固定電話での通話が常用された。その後、ポケベルやPHSの普及で、当時の若者たちはダイレクトに友人と通信コミュニケーションをするようになり、友人の数と接触頻度を重視した交流にシフトした。ポケベルは数字の組み合わせで文字を送信する技術を採用しており、公衆電話で女子高校生たちが長時間にわたってプッシュボタンをたたく姿が話題となった。やがて携帯電話が普及し、他社の携帯電話やパソコンとも手元の携帯電話からメールの送受信ができるようになると、ポケベルは姿を消した。

一方で、インターネットを介し、趣味等のサイトで友人関係を構築する動きや、いわゆる「出会い系」とされるサイトが増加するなど、関係構築と維持のスタイルも多様化した。今日、ソーシャルメディアと呼ばれる交流サイトにより、旧知の関係性が再構築されたり、新規に関係性が構築されるなど、新たな関係構築と維持のスタイルが拡大し、定着しつつある。

このように通信環境が変化した中で、現在の若年層はコミュニケーションや友人関係に対してどのような意識を持っているのだろうか。また、それらは10年前のそれとどのような違いがあるのだろうか。本研究ではこの点に着目し、現状について性別・年代別に傾向を比較し、さらに過去に筆者が実施した調査とのデータ比較を行うことで動向を探った。

(2) 調査概要

アンケート調査の概要は図表1・2のとおりである。本稿では当社モニターの15～44歳を対象に2011年に実施した調査のうち、10年前の調査と比較を行うべく、16～29歳の男女268名の回答について分析を行った。

図表1 アンケート調査概要<2011年調査>

調査対象	15～44歳の男女700名 (第一生命経済研究所生活調査モニターとその家族協力)
調査時期	2011年9月
調査方法	質問紙郵送調査法
有効回答数(率)	604名(86.3%) *本稿ではこのうち16～29歳の男女に該当する268名の回答を分析

図表2 過去のアンケート調査の概要<1998年・2001年調査>

1998年調査	調査対象	16～29歳の男女600名 (第一生命経済研究所生活調査モニターとその家族協力)
	調査時期	1998年11月
	調査方法	質問紙郵送調査法
	有効回答数(率)	550 (91.7%)
2001年調査	調査対象	16～29歳の男女1,500名 (第一生命経済研究所生活調査モニターとその家族協力)
	調査時期	2011年11月
	調査方法	質問紙郵送調査法
	有効回答数(率)	1,386 (97.0%)

2. コミュニケーションに対する意識と実態

(1) 理解する・理解される欲求

コミュニケーションに対する意識についてみる。まず「自分のことをより理解してほしい」という欲求と、「相手のことをより理解したい」という欲求について性別・年代別に比較したところ、いずれの項目でも男性より女性で強く、特に女性は他者理解への欲求が自己理解の欲求を上回っていた(図表3)。女性のほうが男性よりも他人への関心が高いといえる。年代別に顕著な差はみられなかった。

図表3 自分が理解される・相手を理解する欲求(2011年)

(単位: %)

	性別		年代別		
	男性 (n=133)	女性 (n=135)	16～19歳 (n=89)	20～24歳 (n=81)	25～29歳 (n=98)
自分のことをより理解してほしい	33.1	47.8	39.3	41.3	40.8
相手のことをより理解したい	33.1	52.5	40.4	43.8	43.9

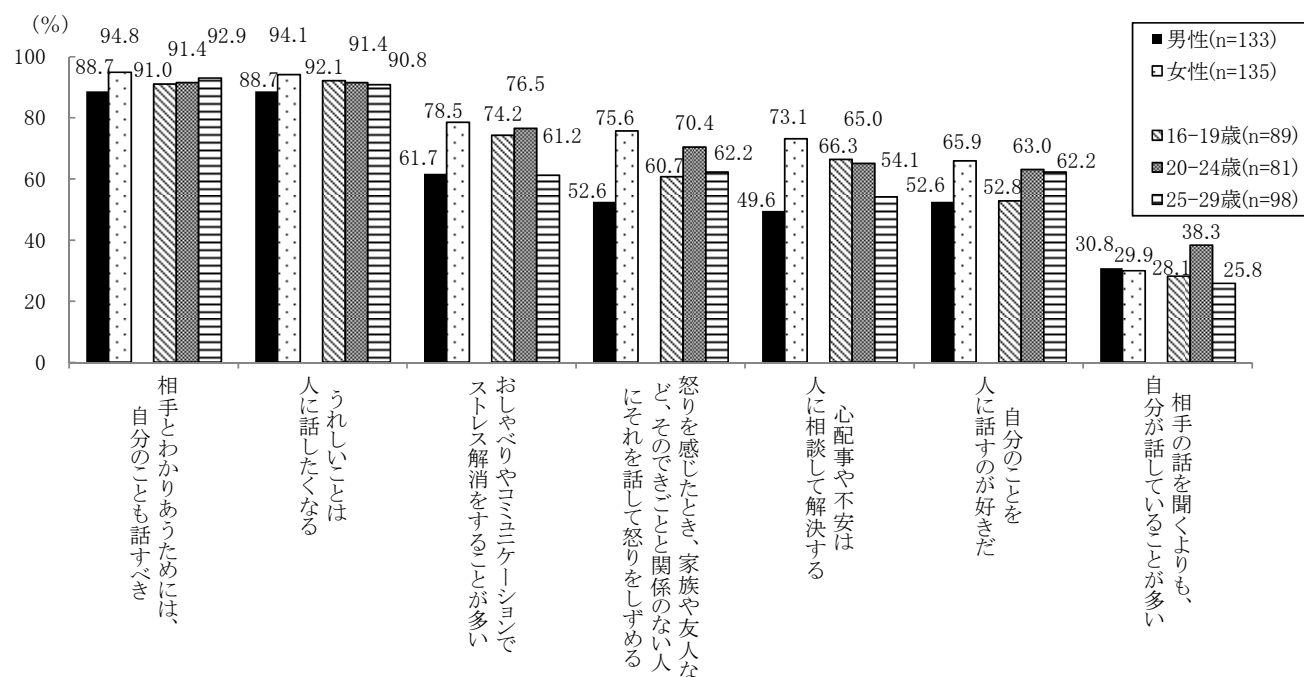
注: 「そう思う」「まあそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」のうち、「そう思う」のみの割合

(2) 自己開示

女性は自分を理解してほしいという欲求が高いことから、自己開示へも積極的であると考えられる。実際に自己開示に関する質問の回答をみると、ほぼすべての項目で女性の回答が男性を上回っていた(図表4)。特に差が顕著なのは「心配事や不安は人に相談して解決する」(23.5ポイント差)、「怒りを感じたとき、家族や友人など、そのできごとと関係のない人にそれを話して怒りをしずめる」(23ポイント差)、「おしゃべ

りやコミュニケーションでストレス解消をすることが多い」(16.8ポイント差)などである。「うれしいことは人に話したくなる」についてはそれほど男女差はみられていないことから、男性ではポジティブな情報を他人と共有する気持ちは女性と差がない一方で、心配事や不安、怒りやストレスを、他人と共有することで発散・解消するという傾向が女性に比べて低いことがわかる。年代別に比較するといくつかの項目で差があるものの、性別ほどの差はみられなかった。

図表4 自己開示(2011年)



注:「そう思う」「まあそう思う」の合計

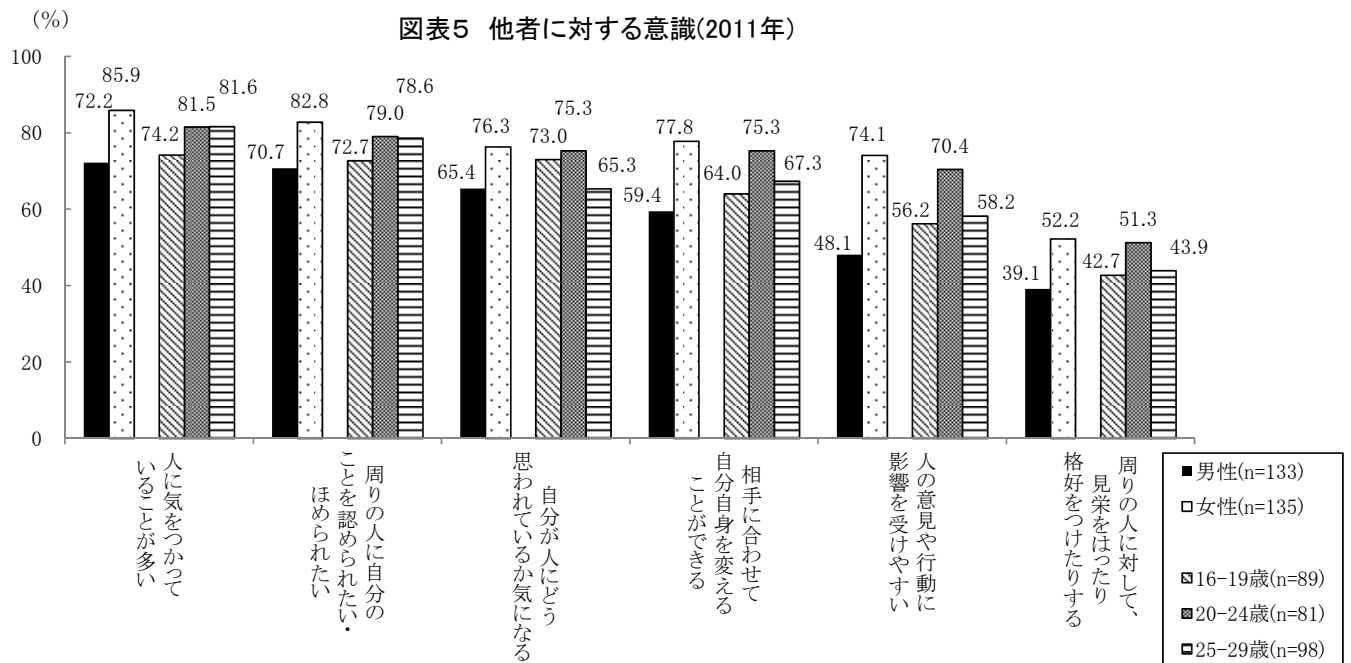
(3) 他者に対する意識

一方、他者に対する意識を尋ねた結果をみると、他者への関心が高く、他者からの影響を受けやすいのはやはり男性より女性である点が確認された(図表5)。特に、「人の意見や行動に影響を受けやすい」とする割合は、男性で48.1%に対し女性で74.1%と、26ポイントの差がみられる。また、「相手に合わせて自分自身を変えることができる」についても、18.4ポイントの差があった。

自己開示に関する結果で見られた傾向と合わせて考えると、女性は自己の感情を他人に発信する傾向が強く、そうした情報の受け手としての女性はそれらに影響を受けて同調する傾向も強いということとなる。いわゆる「クチコミ」の波及効果は男性に比べて女性で高いことが明らかとなっているが(宮木 2011)、こうしたコミュニケーション特性がその背景にあるものと考えられる。

年代別の傾向についてみると、20~24歳でやや他者に対する意識が高い傾向がみ

とれた。学生から社会人に移行して間もない時期に、これまでの共通性の高いコミュニティから、より多様で複雑なコミュニケーション能力を要求されるコミュニティに移動していることが影響しているものと推察される。



注：図表4と同じ

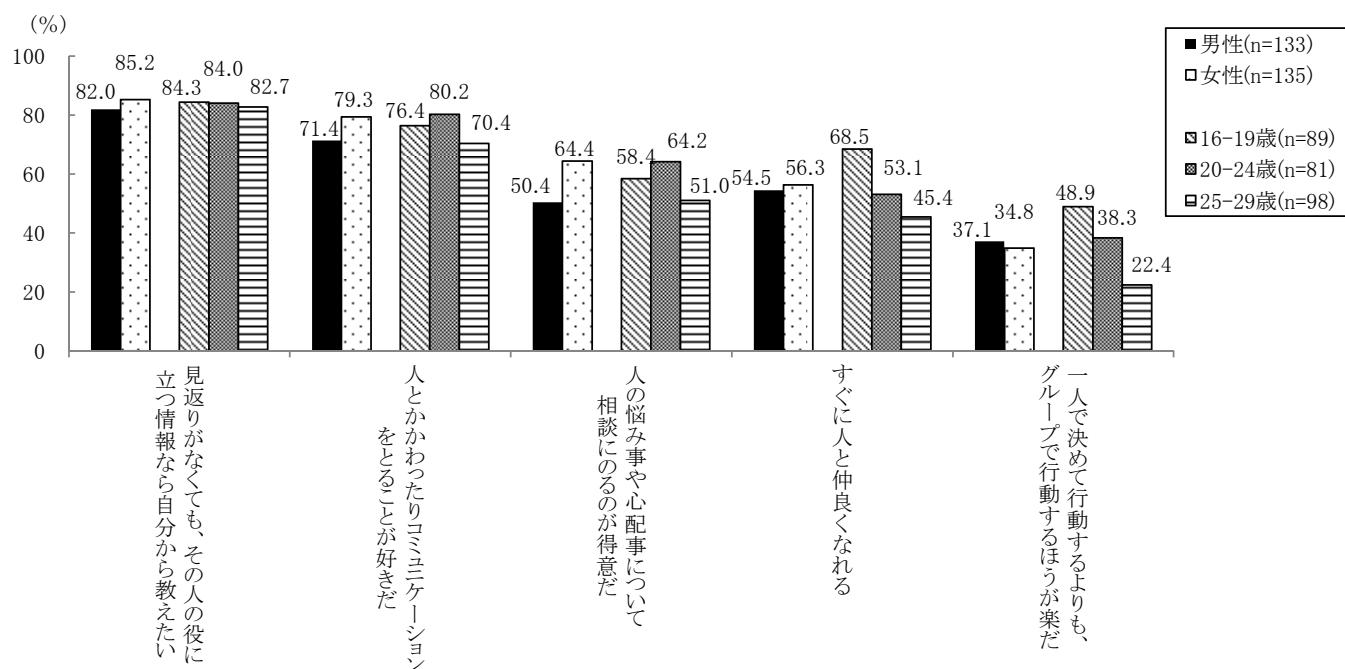
(4)コミュニケーション親和性

さらにコミュニケーション全般に対する態度を尋ねたものについてみると、「見返りがなくても、その人の役に立つ情報なら自分から教えたい」については回答が8割を超えていた(図表6)。ネット上などでは、ソーシャルメディアなどを介して知らない間柄同士でも頻繁に情報交換が行われているが、その多くが無償での情報提供である。これは、筆者が過去に実施した消費に関する情報発信の理由についての調査で、「役に立つ情報は誰かと共有したほうがいいから」が最多となった点と一致する結果である(宮木 2011)。

性別にみると、「人の悩み事や心配事について相談に乗るのが得意だ」「人とかかわったりコミュニケーションをとることが好きだ」については、女性の回答が男性の回答を上回っていた。また、年代別にみると、「すぐに人と仲良くなれる」「一人で決めて行動するよりも、グループで行動するほうが楽だ」については、年代が低いほど高い傾向がみられた。

さらに全体の傾向をわかりやすく示すために、図表4・5・6のそれぞれの項目を使い、「そう思う」を4点、「まあそう思う」を3点、「あまりそう思わない」を2点、「そう思わない」を1点として3つの尺度を作成した。図表4については、7項目す

図表6 コミュニケーション親和性(2011年)



注：図表4に同じ

べてを用いて「自己開示親和得点」を作成した。尺度の信頼性を示す Cronbach の α 係数は0.815である。図表5については、6項目のうち「相手に合わせて自分自身を変えることができる」を除外した5項目を使い「他者意識得点」を作成した ($\alpha=0.796$)。さらに図表6については5項目すべてを用いて「コミュニケーション親和得点」を作成した ($\alpha=0.704$)。以上の3つの得点を項目数で除した値についてみたものが図表7である。

男性に比べて、女性では3つの尺度すべてにおいて男性より平均点が高いことがわかる。特に自己開示に関しては、男性2.72点に対して女性は3.04点となっている。また、年代別には、コミュニケーション親和得点については年代が低いほど高いことが確認された。一方で、20～24歳では自己開示得点と他者意識得点について、それぞれ他の年代より高い人の割合が多い。特に16～19歳では他者意識得点が低い一方で自己開示得点が高いといった傾向がみられている。

図表7 3つの尺度の得点の平均値(2011年)(全体、性別、年代別)

(単位：点)

	全体 (n=266)	男性 (n=133)	女性 (n=135)	16～19歳 (n=89)	20～24歳 (n=81)	25～29歳 (n=98)
自己開示得点	2.88	2.72	3.04	2.86	2.99	2.81
他者意識得点	2.86	2.69	3.02	2.77	2.98	2.82
コミュニケーション親和得点	2.72	2.65	2.79	2.81	2.80	2.57

3. 友人関係に対する意識と実態の変化

(1) 増加傾向にあるもの

続いて友人関係の意識と実態について、過去のデータとの比較をしながらみる。

全体を比較した際に傾向が確認されたものについて、増加傾向にあるもの・減少傾向にあるものを性別・年代別に別にみる。まず傾向が強くなっている項目についてみたものが図表8である。

「友人と恋人では、友人を優先する」とする割合が特に女性を中心に伸びている。また、「同性の友人と異性の友人では、同性の友人を優先する」とする割合が、1998年から2011年にかけて男女ともに増加しており、同性の友人を重視する傾向が強まっているものととらえられる。さらに、「多少自分の意見を曲げて、友人と争うのは避けたい」とする割合や、「友人との話で『適当に話を合わせている』ことが多い」とする割合も増加するなど、友人との調和や同調の傾向が強まっている。これらについては、前出の結果で他者意識が高いことが確認されている2011年時点の20～24歳で、「そう考える」とする人が多い点が特徴的である。

図表8 友人関係の実態で増加傾向にあるもの(性別・年代別)

(単位：%)

	男性			女性			16～19歳			20～24歳			25～29歳		
	1998年	2001年	2011年	1998年	2001年	2011年	1998年	2001年	2011年	1998年	2001年	2011年	1998年	2001年	2011年
n=	254	423	133	296	963	135	168	428	89	194	456	81	188	502	98
友人と恋人では、友人を優先する	39.5	36.1	43.8	31.8	39.6	45.1	45.6	46.5	55.8	37.6	39.2	51.3	24.2	31.3	28.9
				↗			↗			↗					
同性の友人と異性の友人では、同性の友人を優先する	51.6	59.7	64.4	70.0	74.9	83.6	66.3	73.6	74.7	60.7	66.9	85.2	57.9	70.4	64.3
	↗			↗			↗			↗					
多少自分の意見をまげても、友人と争うのは避けたい	46.5	57.6	66.2	60.5	61.6	73.3	59.8	57.5	71.9	44.4	64.1	79.0	59.0	59.5	60.2
	↗			↗			↗			↗			↗		
友人との話で「適当に話を合わせている」ことが多い	39.5	48.1	54.1	43.1	38.4	45.2	39.1	44.6	47.2	41.3	43.7	59.3	43.7	36.5	43.9
	↗						↗			↗					

注：98年から継続的に増加しているものに、このうち98年から11年にかけて20ポイント以上増加したものにクがついている。

(2) 減少傾向にあるもの

続いて減少傾向にあるものについてみる。まず、「友人は多ければ多いほどいいと思う」とする割合が性別・年代別とも大きく減少していた(図表9)。これは、携帯電話の番号・アドレス登録数が多いことがすなわち交友関係の広さであるかのようにとらえられた時代から、単に友人数が多ければいいというものではないという関係性へのシフトととらえられる。実際に、「合コンや集まりに参加するなど、友人や知り合いを

増やすことに積極的だ」とする回答割合が減少傾向にある。

さらに、「友人とのつきあいのために、親や家族を多少犠牲にするのはやむをえないと思う」についての回答も減少している。友人を大切にしつつ、親や家族との関係性も重視する家族志向が強まっている点が示唆される。この傾向は、年代ごとの傾向としてもみられていることに加え、例えば2001年時点での16～19歳と、2011年時点での25～29歳とを比較しても大きく減少していることから、年代としての特徴というだけでなく、世代的な意識変化としてもあらわれている可能性がある。

上記の結果から、若者が個別の友人関係や家族関係を重視するようになっており、それらのバランスをとろうとしている全体像が垣間見えた。

図表9 友人関係の実態で減少傾向にあるもの(性別・年代別)

(単位: %)

	男性			女性			16～19歳			20～24歳			25～29歳		
	1998年	2001年	2011年	1998年	2001年	2011年	1998年	2001年	2011年	1998年	2001年	2011年	1998年	2001年	2011年
n=	254	423	133	296	963	135	168	428	89	194	456	81	188	502	98
友人は多ければ多いほどいいと思う	69.5	69.7	59.4	62.9	58.1	47.4	72.8	68.9	67.4	62.8	57.5	50.6	63.2	59.2	42.9
				↘			↘			↘			↘		
合コンや集まりに参加するなど、友人や知り合いを増やすことに積極的だ	30.1	25.5	27.3	29.4	24.5	17.0	28.4	21.5	26.1	31.1	25.8	28.4	29.5	26.7	13.3
				↘									↘		
友人とのつきあいのために、親や家族を多少犠牲にするのはやむをえないと思う	50.4	41.3	33.8	43.1	34.0	32.6	55.0	47.8	42.7	49.5	36.9	37.0	35.8	25.9	21.4
	↘			↘			↘			↘			↘		
ときどき友人に嘘をついてしまう	45.3	40.7	24.8	47.3	37.6	28.9	39.6	44.4	27.0	47.5	43.0	30.9	31.6	29.5	23.5
	↘			↘						↘			↘		

注:98年から継続的に減少しているものに↘、このうち98年から11年にかけて20ポイント以上減少したものに↘がついている。

(3) 友人の数

続いて友人の数についてみる。

まず、友人の数の変化についてみると、最も多いのは「ふだん、よく会っておしゃべりする人」となっており、特に男性で多いことが明らかになった(図表10)。ただし男性における平均人数は、2001年に比べて2011年で減少している。

一方、女性で男性より顕著に多かったのは「ふだん、電子メールで連絡をとりあう人」となっていた。「ネット上だけでのつきあいの人」については、01年ではソーシャルメディアのようなものが一般的でなかったためにデータを取得しておらず、変化については検証できないが、女性よりも男性で平均人数が多い点が明らかとなった。

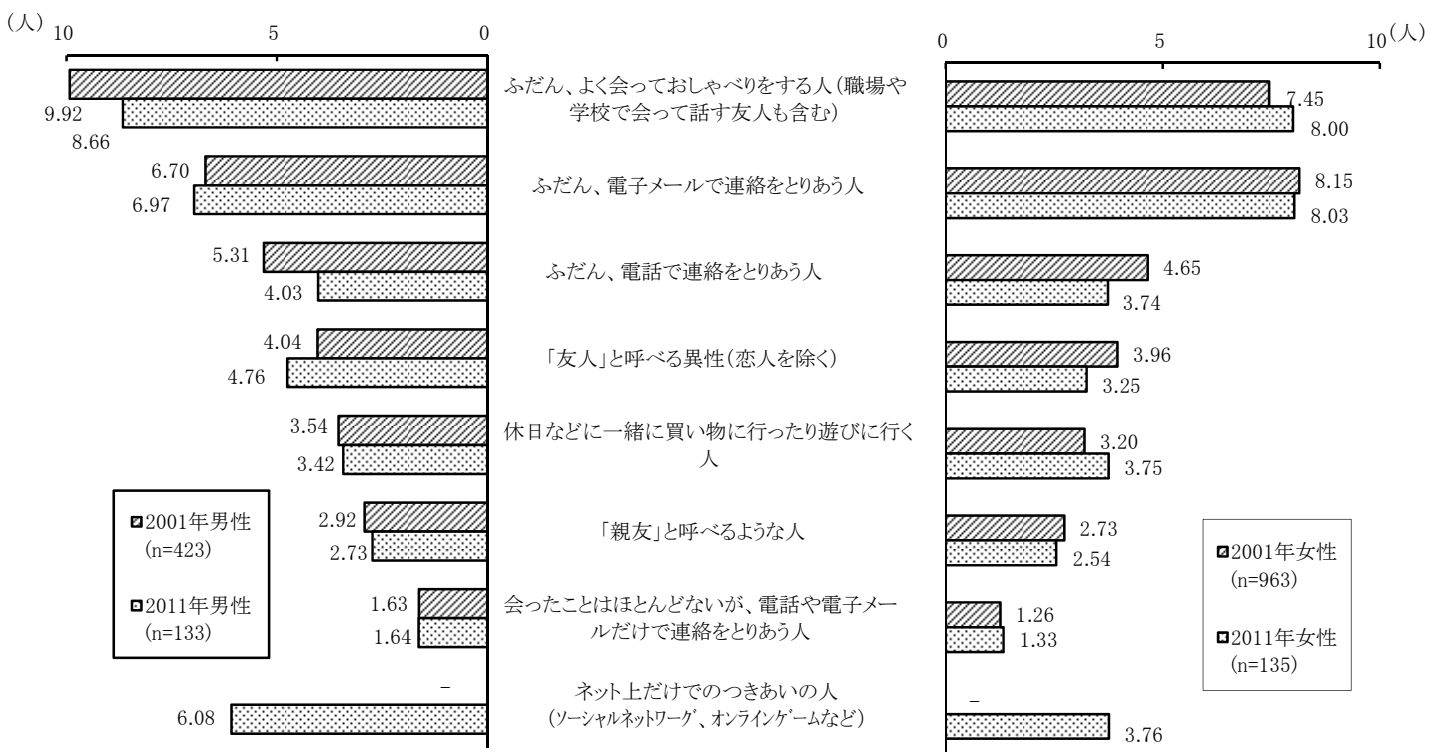
さらに、「『友人』と呼べる異性」が男性で多いのも特徴である。2011年調査からは、

ソーシャルメディアの利用がある男性で異性の友人が6.57人であるのに対し、ソーシャルメディアの利用なしの男性では2.32人と、特にソーシャルメディアを利用している男性で「『友人』と呼べる異性」の人数が多いことがわかっている（図表省略）。これは従来、関係を構築・維持しにくかった異性の友人とのコミュニケーションを、ソーシャルメディアのようなコミュニケーションツールがサポートするようになったことによるものと推察される。筆者が以前実施した「電子メールを使った異性との付き合いに関する調査」（2006）によれば、当時、電子メールを使うと「それほど親しくない異性の知人とのやりとりがしやすくなった」とした人が8割を超えており、「異性と出会ってから、親しくなるまでの時間が短くなった」「異性に対して、恥ずかしがらずにコミュニケーションをとれるようになった」との回答も7割前後を占めるなど、対人関係の維持形態が電子メールによって変化したことが明らかとなっている。ソーシャルメディアは、この関係維持に加え、新たに「関係構築」の要素を加える形で、さらに新たな対人関係をもたらしたものと推察される。

一方、「ふだん、電話で連絡をとりあう人」については男女共に減少傾向にあり、連絡手段として通話が常用されなくなってきたことが示された。

年代別にみると、大半の項目で年代が低いほど平均人数が多いという傾向がある中で、「ネット上だけでのつきあいの人」と「会ったことはほとんどないが、電話や電子メールだけで連絡をとりあう人」は、年代が高いほど平均人数が多いという傾向が認められた（図表11）。

図表10 友人の平均人数の推移(性別)



図表11 友人の平均人数(2011年)(年代別)

	(単位:人)		
	16~19歳 (n=89)	20~24歳 (n=81)	25~29歳 (n=98)
① ふだん、よく会っておしゃべりをする人(職場や学校で会って話す友人も含む)	10.05	8.98	6.23
② ふだん、電子メールで連絡をとりあう人	9.37	7.64	5.69
③ ネット上だけでのつきあいの人(ソーシャルネットワーク、オンラインゲームなど)	3.72	4.92	5.96
④ 「友人」と呼べる異性(恋人を除く)	5.22	5.01	2.07
⑤ ふだん、電話で連絡をとりあう人	3.98	3.75	3.90
⑥ 休日などに一緒に買い物に行ったり遊びに行く人	4.31	3.85	2.72
⑦ 「親友」と呼べるような人	3.03	2.58	2.32
⑧ 会ったことはほとんどないが、電話や電子メールだけで連絡をとりあう人	0.70	1.51	2.17

さらに、友人数と既出の3つの尺度の得点との相関をみたところ、図表12で示したように、自己開示得点では①②④⑥⑦(③⑤⑧以外)の項目と、コミュニケーション親和得点では同①②④⑤⑥⑦(③⑧以外)の項目と相関があったが、他者意識得点についてはいずれも相関がなかった。また、多くの友人関係において、自己開示得点が高くコミュニケーション親和得点が高いほど友人数が多い中で、ネット上の知人の数と自己開示得点やコミュニケーション親和得点には関係がないという点が確認された。今回それなりの人数の存在が認められた「ネット上だけでのつきあいの人」について、自己開示得点やコミュニケーション親和得点との関係性が認められなかったのは興味深い。

図表12 友人の平均人数と尺度の相関(2011年)

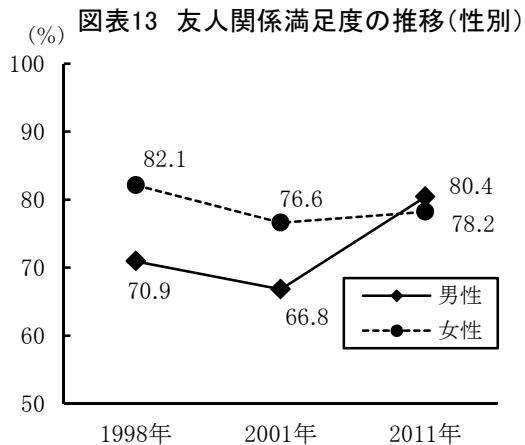
	自己開示	他者意識	コミュニケーション親和
① ふだん、よく会っておしゃべりをする人(職場や学校で会って話す友人も含む)	**		**
② ふだん、電子メールで連絡をとりあう人	**		**
③ ネット上だけでのつきあいの人(ソーシャルネットワーク、オンラインゲームなど)			
④ 「友人」と呼べる異性(恋人を除く)	**		**
⑤ ふだん、電話で連絡をとりあう人			**
⑥ 休日などに一緒に買い物に行ったり遊びに行く人	**		**
⑦ 「親友」と呼べるような人	**		**
⑧ 会ったことはほとんどないが、電話や電子メールだけで連絡をとりあう人			

注:**は5%水準で有意

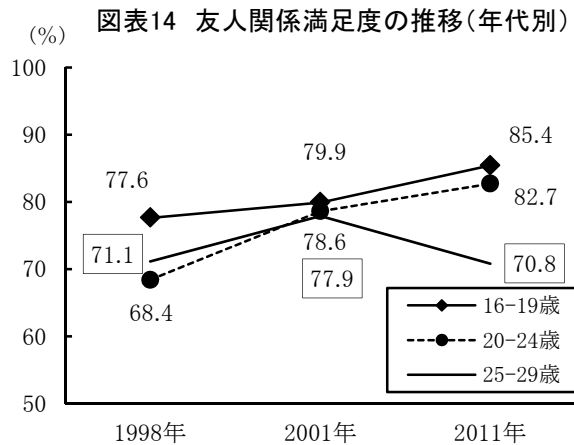
(4) 友人関係満足度

友人関係満足度の変化についても1998年・2001年・2011年で比較を行った(図表13・14)。その結果、これまで「非常に満足している」については女性が男性を上回っていたのに対し、2011年調査では男性の割合が女性をわずかに上回っていた。過去二回の推移をみると、性差が徐々に縮まってきた様子が確認できる。一方、年代別にみると、16~19歳と20~24歳については増加傾向にあるが、25~29歳については2011年に満足度が下がっているとの結果を得た。友人関係満足度と友人数の関係についてもみた

ころ、図表12と同様に③⑧以外は相関がみられ、多くの友人関係において、その人数が多いほど満足度も高い傾向がある中で、ネット上での知人数は満足度と関連性が見られなかった（図表省略）。また、尺度との関連性をみると、特にコミュニケーション親和得点の高さと友人関係満足度の高さに正の相関がみられ、自己開示得点とも正の相関がみられた（図表省略）。



注:「非常に満足している」の割合
2001年のnは図表10に同じ
1998年は男性 n=254、女性 n=296



注:「非常に満足している」の割合、25-29歳の値を□で囲っている
2001年は16-19歳 n=428、20-24歳 n=456、25-29歳 n=502
1998年は16-19歳 n=168、20-24歳 n=194、25-29歳 n=188

4. 考察

以上についてまとめる。まず、全般的に他者に対する意識は男性より女性において高く、自己開示性やコミュニケーション親和性が男性より高い傾向が確認された。同様の傾向が筆者の過去の調査（1999, 2002, 2007）などでも見られており、コミュニケーション全般に関する意識や傾向には大幅な変化がないことが確認された。

その一方で、友人に対する意識については変化がみられている。まず、ソーシャルメディアの普及なども手伝い、つきあう友人の幅が広がる一方で、以前に比べて量より質を重視し、バランスや調和を重視した関係性を築いていこうとする兆候がみられた。10年前のパーソナル通信メディアの普及期にみられた、とにかく大勢とつながりたいという欲求が、コミュニケーション端末の普及と変遷を経て、新しいステージにシフトしつつあるととらえられる。

また、一般に友人関係においては自己開示性が高く、コミュニケーション親和性が高いほど友人数が多い中、ネット上の知人の多さと自己開示性やコミュニケーション親和性に関連性がない点も今回明らかとなった。また、親友や一緒に出かける友人など、多くの友人数は友人関係満足度の高さと正の関係性がある一方で、ネット上だけでの付き合いの人の多さは友人関係満足度に無関係である点も明らかとなった。ネット上だけでの付き合いは、心理的につながっている感覚をもたらしてはいても、それ

ぞれの個人が必ずしも互いを「友人」と認識してつながっているわけではないということである。

さらに、男性の満足感が2001年より大きく向上していた。今回の調査から、友人関係満足度は、コミュニケーション親和性と正の相関があることが確認されている。従来、男性は文字コミュニケーションにそれほど積極的ではなかった。筆者の調査研究において、男性は通話利用が多く、通信メディアを「手段」ととらえる傾向が強いに対し、女性は文字コミュニケーションへの依存が高く、通信メディア利用やコミュニケーション自体を「娯楽」ととらえる傾向が強かった（宮木 2002）。近年、この傾向に男女差が見られなくなってきたのは、ソーシャルメディアとスマートフォンの普及でこれまで文字コミュニケーションに積極的でなかった男性が参加したことが一因と考えられる。特に男性は、ネット上だけの友人が女性に比べて多いとの傾向が今回確認されたが、実際にソーシャルメディアは男性ユーザーが多いことが、「ソーシャルメディア白書2012」でも指摘されている。こうした男性側の通信環境の変化と連動して、男性におけるコミュニケーションが手段としてのみでなく娯乐的なものにシフトした結果、友人関係満足度が向上した可能性がある。

通信メディアの変化はコミュニケーション感覚や対人距離感に少なからぬ影響を与え、友人関係の捉え方を変化させてきた。こうしている間にも、新しい通信メディアやつながり方が絶え間なく出現し、コミュニケーションの形態が変化している。今日の若者のコミュニケーションスタイルと友人関係は、ますます見えにくくなり、調査データの鮮度劣化も著しい。今後も調査の形を短期スパンで変化・対応させながら、変化している部分と普遍的な部分を見極めつつ追跡していく必要がある。

（研究開発室 主任研究員）

【参考文献】

- ・総務省，2011，『情報通信に関する現状報告』。
- ・(株)トライバルメディアハウス+(株)クロス・マーケティング編著「ソーシャルメディア白書2012」翔泳社。
- ・橋元良明編，2011，『日本人の情報行動2010』 東京大学出版会。
- ・宮木由貴子，2012，「匿名コミュニケーションの対人距離感」『Life Design Report』(Summer 2012. 7)。
- ・宮木 由貴子，2011a，「消費に関する情報伝達 一 家族や知人に伝えるクチコミ、ネット上に発信するeクチコミー」『Life Design Report 』(Winter 2011. 1)。
- ・宮木 由貴子，2007，「青年層の異性付き合いにおける電子メール利用」『Life Design Report』(2017. 5-6)。
- ・宮木 由貴子，2002，「青年層の通信メディアの選択と友人関係 ～音声コミュニケーションと文字コミュニケーション」『LDI Report』(2002. 4)。
- ・宮木 由貴子，1999，「青年層の通信メディア利用と友人関係」『LDI Report』(1999. 7)。